



故 木村 洋二 教授

木村洋二教授を悼む

吉 岡 至

木村洋二先生は、2009年8月19日、肺がんのため、療養先の大阪府枚方市の星ヶ丘厚生年金病院にて逝去されました。享年61歳、まだこれからというときに、無念さを残して旅立たれました。

木村先生は、青森県八戸市のご出身で、京都大学文学部哲学科を1972年3月に卒業されたあと、同大学院文学研究科社会学専攻修士課程に進まれ、「パーソナリティ系と集団系の機能的系モデル」の論題で1974年3月に文学修士の学位を取得されました。その後、同専攻博士課程在籍中の1975年4月に関西大学社会学部の助手になられ、1978年4月専任講師に、また1981年4月助教授に、さらに1988年4月教授に昇任され、亡くなられる2009年8月まで、およそ35年の長きにわたり、本学の学部・大学院の研究・教育の発展に尽力されました。

学部では、専門科目「マス・コミュニケーション特殊講義Ⅲ」をはじめとして、「社会的コミュニケーション論」「コミュニケーションと人間」「コミュニケーションと社会」などを担当され、とてもユニークな授業で、つねに学生に知的刺激を与え続けられました。また、専門演習・卒業研究（ゼミ）においても、先生の魅力は遺憾なく発揮され、ゼミの評判もつねに高く、幾多の優れた卒業生を送り出されました。

大学院では、社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻の修士課程（1994年）・博士課程（1996年）が設置されてからは、授業や演習の担当のみならず、当初から両課程の運営にかかわられ、カリキュラムの改革にも豊富なアイデアで精力的に取り組まれました。のちには、大学将来構想計画委員会副委員長（2000年10月～2002年9月）として、また社会学研究科科长（2002年10月～2004年9月）として、今日につながる大学・大学院の改革・発展の方向を模索されました。

ここ数年は、ソシオン研究プロジェクトユニットの研究主幹として、「関大笑い講」の企画・開催や、全学の学生を対象とする講義「笑いの総合科学をめざして」（テーマ・スタディ）の開設・運営に力を入れられました。また、新学部（人間健康学部）の2010年開設に合わせて「笑いとユーモアの科学」の拠点づくりに向かわれ、苦手とされる事務作業にも多くの時間を割かれていました。その創設を目前にして、家の主人を失うかのように、新学部における専門の専攻やコースの設置は叶いませんでしたが、一つの礎を築かれたことは間違いないと思います。

また同じころ、1994年に設立された「日本笑い学会」の副会長を務められるかたわら、新たな研究活動の組織化にも尽力され、2008年には「ユーモア・サイエンス学会」の設立や学会年報『笑いの科学』の創刊を実現されました。2009年の正月を迎えられてから、ご

自身の身体の異変に気づかれるまでは、まさに多忙な日々を過ごされていたように思います。

改めて言うまでもないことですが、「笑い」を抜きに先生を語ることはできません。そのなかでも、だれもが知る「木村神話」は、先生が笑いの研究をされるきっかけになったとされる「笑い茸」鍋のエピソードではないでしょうか。30年ほど前の話、先生が助手をされていたころ、友人3人と鍋を囲んでお酒を酌み交わされていたときに、なぜか3人とも笑いが止まらなくなり、3時間も笑い転げていたとのこと。「人生観がかわった」と、ご自身もよく語られていた逸話のようです。それまでは笑うことの少ない先生だったそうですが、すべてを無（ゼロ）にする、空っぽにする、という感覚をもたらす笑いが先生の身体にも宿り、鋭いまなざしとは対照的な明るい笑顔が、先生のトレードマークになり、笑いの研究が先生のライフワークになりました。

先生の笑いの研究は、何年かの時を経て、「笑いの統一理論」というかたちで世に出ました。その統一理論に関する論考は、「笑いのメカニズム」のメインタイトルで1982年11月号『思想』（岩波書店）に掲載されたのちに、著書『笑いの社会学』（1983年 世界思想社）にも加筆されて収録されています。先生はよく、その著書を「笑えない笑いの本」と称されていましたが、そのあとがきには「軽佻にして浮薄極まりないあのこしゃくな<<笑い>>に統一的説明を与えたおそらくは世界で初めての理論仮説である」と記されています。自著の自嘲ぎみの呼称とは異なり、どこを探してもほかにない、唯一無二の著作であるとの誇らしさも滲み出ています（「単なる理論仮説」とも記されていますが）。

思えば、その統一理論の発表からすでに四半世紀が過ぎっていますが、再び先生は「世界で初めて」を作り出されました。それは、横隔膜に発生する特有の微細振動を電氣的に測定する「横隔膜式笑い測定システム（DLM：Diaphragmatic Laughter Measuring System）」です。この測定機の実験報告は、共著論文「笑い測定機の冒険」として『笑いの科学』vol.1（2008年5月）に掲載されています（ここでも「試作」と断られています）。

わたしは、ある研究プロジェクトの打ち合わせの場で、木村先生が、「笑いを^{はら}から科学する」ことの意味を、「笑いを^{はら}で測定する」という着想を、真面目に語られていたことを思い出します。そのときのわたしは、失礼ながら「なにを馬鹿げたことを……」と思い、それこそ^{はら}から笑いそうになったことを覚えています。それが「横隔膜式笑い測定機」に結実したとき、「馬鹿な？」の嘲笑が「まさか！」の驚嘆に一変しました。捻くれ者のわたしは、作り笑いや愛想笑いしかできず、横隔膜と笑いの関係が理解できなかったのかもし

れません。先生の着想は、直感であったにせよ、単なる思いつきではなく、「木村神話」のエピソードで語られている体験——3時間笑ったあとに^{はら}肚（横隔膜）が痛くて動けなかった——に裏付けられていたものだったようです。研究の当初から「笑いのメカニズム」はその統一理論の構築とその測定機の開発が一体のものだったわけで、先生がライフワークとして心血を注がれた笑いの研究の全体の構想が花開いた瞬間だったのかもしれませんが。

先生が亡くなられたあとに、先生の編集で出版された『笑いを科学する——ユーモア・サイエンスへの招待』（2010年 新曜社）では、「笑いは21世紀人間科学のフロンティア」と位置づけ、その未開の地に鋤を入れ、笑いの科学という新しい地平を拓こうとする、ひとつのまじめな冒険を始めようとされていました。おそらく先生は、新たな構想を胸に秘め、研究の次なるステップを踏み出そうとしておられたのでしょう。なにしろ、「200年後に誰かが読んで笑ってくれるだろうと思って書いた」最初の笑いの論文、その成果がはやくも国際的に注目されるようになった、と先生ご自身が感じておられたのですから。

先生はふだんから着想を記し、構想を練るための努力を続けてこられたに違いありません。わたしには、情報カードに青いサインペンを差し込んで持ち歩かれている姿が、そしてそのペンでカードにしきりにメモを書き留められている姿が思い出されます。会議の席でご一緒のときも、会議をよそにして（ときに持論や正論を大きな声でおちあげられることもありましたが）、自分の世界に入り込み、思索をめぐらし、ペンを走らせている先生の姿をいつも横で眺めていました。わたしにはできない芸当で、うらやましくもありました。

それにしても、髭を蓄えられた独特の風貌で「きみの身体の具合はどうか？」と声をかけてくださっていた、その先生にお目にかかれなくなったのは淋しいかぎりです。奥様の一恵さんの言葉を借りれば、先生はご自身の異変（腰の痛み）をまずは「車のシートの不出来に転嫁」されたようです。けれども、具合が悪かったのは、先生が乗っておられた車ではなく、ご自身の車自体がガタピシしていたのでした。先生はある雑誌のインタビューのなかで「ギアをニュートラルに入れて、プラスもマイナスも外れてしまってゼロになっている状態。それが笑いだ」という考えを語られていました。先生は最後の最後にギアの入れ方を少し間違えられたのかもしれませんが、そのうえ無理にアクセルを踏み、エンジンを吹かし過ぎてしまわれたのかもしれませんが。のちにエンジントラブルに気づかれ、再びギアをニュートラルに戻し、「笑って治す」気持ちをもたれて、車を車庫に入れるかのように、治療に専念されました。それが2009年の4月に入ってからのことでした。わたしたちは、先生の復帰を願いながら春学期の授業を終えて夏休みを過ごしておりました。

病気を克服するのは大変なことで、とても時間のかかることだと思ってはいましたが、それでも悲報は突然にやってくるもので、その知らせに接したときは愕然としました。

再び奥様の言葉を借りれば、「蟬が経を謳う村」のお寺で、2009年8月22日、わたしたちは先生とお別れをしました。亀岡市東別院町湯谷、自然に恵まれた棚田の美しい山里の小さなこの村を、先生はこよなく愛されていたようです。告別式にもかかわらず、静かな村に賑わいをもたらすかのように、先生に縁のある多くの方々が、交通の便がよいとはいえないこの村を訪ねて来られました。弔問の方々の車の誘導をしながら、山間の棚田の景色を眺め、遠くに見えるお寺のお堂の屋根に向かって合掌した、あの夏の暑い日を、わたしは一生忘れないでしょう。2010年1月の「関大笑い講」では、先生の幽霊が笑いを求めて現れたようですが、「最後はあーいい人生だったと笑って死ぬこと」を願っておられた、木村洋二先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

2010年2月

社会学部教授

吉 岡 至

木村洋二 教授の略歴および主要業績

略	歴
---	---

- 1972年 3月 京都大学文学部哲学科 卒業（文学士）
1972年 4月 京都大学大学院文学研究科修士課程社会学専攻 入学
1974年 3月 京都大学大学院文学研究科修士課程社会学専攻 修了（文学修士）
1974年 4月 京都大学大学院文学研究科博士課程社会学専攻 入学
1977年 4月 京都大学大学院文学研究科博士課程社会学専攻 博士課程単位取得後退学

職	歴
---	---

- 1975年 4月 関西大学社会学部助手
1978年 4月 関西大学社会学部専任講師
1981年 4月 関西大学社会学部助教授
1988年 4月 関西大学社会学部教授

所属学会等

日本社会学会、関西社会学会、日本マス・コミュニケーション学会、経済社会システム学会、日本笑い学会、ユーモア・サイエンス学会

研 究 業 績

著書等

笑いの社会学	単著	1983年1月	世界思想社
視線と「私」	単著	1995年3月	弘文堂
笑いを科学する	編著	2010年1月	新曜社
価値意識の社会学的研究（野崎治男編）	共著	1981年5月	関西大学経済・政治研究所双書
社会学への誘い（満田久義／青木康容編著）	共著	1999年4月	エムアンドエヌ インターナショナル
虚偽意識	訳書	1980年5月	人文書院
友人たち／恋人たち	訳書	1983年1月	みすず書房
マーガレット・ミードとサモア	訳書	1995年5月	みすず書房

学術論文

機能的系理論の根本問題——機能要件論の再構成をめざして	単著	1975年5月	ソシオロジ（社会学研究会編）、第19巻3号、24-50頁
パーソナリティ系モデルと集団系モデルのアーティキュレーションについて	単著	1975年11月	関西大学社会学部紀要、第7巻1号、285-295頁
人間的結合の理論——I次元の機能をめぐって	単著	1976年6月	ソシオロジ（社会学研究会編）、第21巻2号、21-39頁
生世界論-1-生きられた世界の構造に関する試論	単著	1977年3月	関西大学社会学部紀要、第8巻2号、119-139頁
意識機能と写像の概念—生世界論のための追補-1-	単著	1982年3月	関西大学社会学部紀要、第13巻2号、67-78頁
笑いのメカニズム——笑いの統一理論をめざして	単著	1982年11月	思想（岩波書店）、第701号、66-89頁
退屈論——世界の自明化と退屈の問題-1-	単著	1987年11月	関西大学社会学部紀要、第19巻1号、183-204頁
退屈論——世界の自明化と退屈の問題-2-	単著	1988年3月	関西大学社会学部紀要、第19巻2号、71-90頁
話せばわかるか？：出会い・交換・コミュニケーション	単著	1988年1月	社会・経済システム（社会経済システム学会編）、第6巻、11-15頁
ソシオンの理論——ソーシャル・ネットワークへのシステム・ダイナミック・アプローチ	共著	1990年1月	関西大学社会学部紀要、第21巻2号、67-143頁
ソシオンの理論-2-ダイアッドからトライアッドへ	共著	1991年1月	関西大学社会学部紀要、第22巻2号、165-221頁
ソシオンの理論：ソーシャル・ネットワークへのシステム・ダイナミック・アプローチ	単著	1992年1月	社会・経済システム（社会経済システム学会編）、第11巻、50-56頁

ソシオンの理論-3-ソシオンの一般理論	共著	1993年9月	関西大学社会学部紀要、第25卷1号、63-163頁
欲望のソシオン理論——ソシオンダイアッドにおける差異と欲望の力学と感情のキューブモデル	単著	1993年12月	関西大学社会学部紀要、第25卷2号、1-41頁
「予言の自己実現」と因果の環（予言の自己成就（特集））	単著	1995年5月	ソシオロジ（社会学研究会編）、第40卷1号、58-67頁
ソシオンとコミュニケーション——ソシオグラフとソシオマトリックスに見るコミュニケーションと相互主観性の多重構造	単著	1996年3月	関西大学社会学部紀要、第27卷3号、155-178頁
クリシュナムルティ・ノート——「問いとこたえ」の翻訳と用語についての注釈	共著	1997年5月	関西大学社会学部紀要、第29卷1号、159-224頁
クリシュナムルティ・ノート（その2）	共著	1997年9月	関西大学社会学部紀要、第29卷2号、105-147頁
ソシオンの一般理論（I）	単著	1999年4月	関西大学社会学部紀要、第30卷3号、65-126頁
〈資料〉無為庵・小林勝次郎の「揖（かじ）」	共著	1999年4月	関西大学社会学部紀要、第30卷3号、127-177頁
ソシオンの一般理論（II）	単著	2000年3月	関西大学社会学部紀要、第31卷2号、63-149頁
ソシオンの一般理論（III）：トリオンからソシオスへ（特集 ソシオン理論の冒険）	単著	2001年3月	関西大学社会学部紀要、第32卷2号、1-104頁
親・子・カルトのトライアッド：信者と家族と教団のソシオン・ネットワーク分析（特集 ソシオン理論の冒険）	共著	2001年3月	関西大学社会学部紀要、第32卷2号、105-175頁
イジメのモードとネットワークの力学：排除のソシオン理論をめざして（特集 ソシオン理論の冒険）	共著	2001年3月	関西大学社会学部紀要、第32卷2号、177-204頁
マンガにおける荷重表現：ページの「めぐり効果」とマンガの「文法」をめぐる（特集 ソシオン理論の冒険）	共著	2001年3月	関西大学社会学部紀要、第32卷2号、205-251頁
ソシオンの一般理論（IV）：愛と欲望のキューブモデルとソシオネットの力学系	単著	2002年12月	関西大学社会学部紀要、第34卷1号、1-44頁
ソシオンのネットワークと鏡像のコミュニケーション（1）：密告・盗聴のモードをふくむ会話のマトリックス	共著	2002年12月	関西大学社会学部紀要、第34卷1号、45-97頁
「李登輝来日」をめぐる4大新聞の荷重報道の比較研究	共著	2003年1月	関西大学社会学部紀要、第35卷1号、157-210頁

「拉致」問題をめぐる4大新聞の荷重報道：多元メディアにおける「現実」の相互構築をめぐって	共著	2004年3月	関西大学社会学部紀要、第35巻3号、89-121頁
「新聞見出し（活字サブリミナル）」は拉致をいかに報じたか——四大紙徹底全調査全分析	単著	2004年6月	諸君！（文芸春秋社）、第36巻6号、128-138頁
ソシオン・コミュニケーションの多重媒介モデル	共著	2005年2月	関西大学社会学部紀要、第36巻1号、75-117頁
「拉致」問題をめぐる4大新聞の荷重報道（2）：小泉首相再訪朝に関する報道と荷重分析	共著	2005年2月	関西大学社会学部紀要、第36巻1号、119-154頁
ソシオン理論の骨子（1）	単著	2005年2月	関西大学社会学部紀要、第36巻1号、233-256頁
献身とテロリズムの感情論理：オウム真理教事件についてのソシオンの考察	共著	2005年3月	関西大学社会学部紀要、第36巻2号、119-164頁
「拉致」問題をめぐる4大新聞の荷重報道（3）：「日朝実務者協議」を報じる見出し語の分析	共著	2006年1月	関西大学社会学部紀要、第37巻1号、1-55頁
日本の4大新聞における皇室報道の比較研究：皇太子さまの「人格否定」発言を事例として	共著	2006年3月	関西大学社会学部紀要、第37巻3号、56-106頁
ソシオン理論の骨子（2）：トリオンの幾何学的表現とネットワーク動作の記述法	単著	2006年1月	関西大学社会学部紀要、第38巻1号、103-127頁
笑い測定機の冒険	共著	2008年5月	笑いの科学（ユーモアサイエンス学会編、松籟社刊）、第1巻、4-7頁
おかしみの発生時における剣状突起の筋電位反応	共著	2008年5月	笑いの科学（ユーモアサイエンス学会編、松籟社刊）、第1巻、8-10頁
Assessment of laughter by diaphragm electromyogram	共著	2009年1月	European Journal of Clinical Investigation. 39(1) : 78-79.